



坂東 多壽夫さん
(86歳・椿町)

昭和19年の夏、15歳のとき、郵便局で集配員をしていました。用事で役場に行くとき兵役係の人から「軍隊の検査を受けないか」と声を掛けられました。どうせ戦争に行くのだったら自分から志願しようと、検査を受けました。海軍に合格し、その年の暮れに入隊。長崎の佐世保にある相浦海兵団で4カ月間基礎教練を受けました。寝床のハンモックを設営するのが最初の訓練。班全員できないと眠らせてもらえなかった。カッター訓練や銃剣術など、同年輩が多く切磋琢磨しました。日曜日は休みで、みんな里に便りを書いていました。書きながら、しくしくと涙を流していました。まだ子どもなんです。春には沖縄戦が始まり、先輩が、次々と駆り出されていきました。私は、特技を身につけるため神奈川の横須賀にある海軍水雷学校に入りました。魚雷をばらしたり、組み立てたり、部品の名称を一生懸命覚えめました。7月30日に修業し、広島の大田にある倉橋島の特攻基地に配属されました。ご飯には刺身が付くこともあり、たばこも酒も支給されました。特攻隊員は、いつ出撃命令が出るか分からんからよくしてくれた。愛媛の佐田岬の先の三机で特殊潜航艇「蛟龍」での出撃準備中に終戦。9月の秋祭りの頃に帰ってきました。



特集

いま、伝えたいことがある

戦争の群像 (前編)

幾多の尊い生命が失われた太平洋戦争が終結して、70年。現在生きる、ほとんどの人は戦争の時代を経験していない。失われていく記憶、風化していく記録……。いま、何かできないか。町に出て、戦争体験者の話を聞いた。今月号は戦争に行った方の体験と、来月号では阿南での戦時中の人々の暮らしぶりの2回にわけてその証言を綴る。この体験談を過ぎ去った日の昔話にしてはならない。



(上写真：森岡博美さんの日の丸と千人針、下写真：谷 敬二さんを見送った楠根町の三本松)

【昭和初期から太平洋戦争 終戦までのとき】

●太平洋戦争に至るまで

昭和初期の日本は、金の輸出解禁や世界恐慌の波及によって、都市では企業倒産による失業者が増え、農村でも農産物の価格低下と生糸の対米輸出の激減に見舞われ、深刻な不況になった。こうした経済危機や不況からの突破口を、軍部中心の支配勢力は大陸への進出に求め、昭和6年9月18日、満州(現・中国東北部)の柳条湖事件を契機として、日本軍は満州の主要都市を占領し、「満州国」を建国した(満州事変)。国内では、昭和7年5月15日に海軍の急進的な青年将校が中心となって首相官邸などを襲撃した「五・一五事件」、昭和11年2月26日には、天皇親政による国家改造を唱える陸軍将校による「二・二六事件」が発生した。その後、軍部はしだいに政治的な発言力を強め、政党に代わって実質的に日本の政治を支配し、戦争への道を開いていった。

そして昭和12年7月7日、北京郊外で、夜間演習中の偶発的な衝突事件から日中両軍が戦闘状態に入るといふ事態が発生し(盧溝橋事件)、日中戦争が始まった。日本軍は首都・南京を占領したのち、武昌、漢口、広州と中国の主要都市を次々と占領下に置いたが、戦争は次第に泥沼化し、長引いていった。国内では同年9月、「国民精神総動員運動」が開始され、国民は戦争中心の生活に切り替えることが奨励された。



柳沢 儀一さん
(89歳・水井町)

16歳で海軍へ志願し、飛行機の整備士としての訓練を受けた私は、高知海軍航空隊で零式艦上戦闘機、通称「零戦」などの整備を担当していました。配属から1年ほど経った日、私を含む30人の兵が指揮官に呼び出され、「今から練習機『白菊』に乗って出発する、黙って付いて来い」と言われました。行先は告げられないままです。途中、急に進路を変えたりしながら航行し、着いたのは同じく高知の白菊特攻基地。鹿児島から特攻攻撃をする予定だったけれど、出撃が見送られたためこの地で待機すると聞きました。しかし、窪川は急ごしらえの特攻基地で格納庫がありません。敵から攻撃されないよう白菊の機体を分解して山奥へ隠し、いつになるか分からない出撃命令を待ちながら、必死に訓練に明け暮れました。そして昭和20年、8月14日の夕方。「明日の朝に出撃できるよう、飛行機を整備しろ」と命令がありました。覚悟はすでに決まっていた。徹夜で作業を終えた15日の朝、準備を終えて待機していましたが、いつまで経っても出撃命令がありません。おかしいなあと思っていると、正午に大切な放送があるから聞くように言われました。玉音放送でした。私が特攻攻撃をするはずだった日に、戦争が終わったのです。



谷 敬二さん
(88歳・楠根町)

私は国鉄に就職したものの、上司との折り合いが悪く、退職したらすぐ赤紙が届きました。17歳でした。まもなく長崎の佐世保にある海軍の軍需工場で、艦船に搭載する大砲や機関銃の検査を担当することになりました。その間、幾度となく空襲に遭い、いつ死ぬか分からない恐怖を感じていました。こんな所で無駄死にするなら国のために戦いたいと思い、第16期甲種飛行予科練習生として特攻隊に志願しました。福岡海軍航空隊への配属が決まった私は、最後の別れにとふるさと楠根に帰ることを許されました。出征時、村人が村はずれの三本松まで見送ってくれた光景が今でも忘れられません。福岡で厳しい訓練と特攻隊員としての教育を受けたのち、昭和20年6月頃に佐賀の名護屋にある震洋特攻基地へ配属されました。特攻兵器「震洋」はベニヤ板製で、船の前方部に爆弾を積んだもの。私は出撃命令を待ちながら、震洋を隠すための壕を掘り続けました。本当に悲惨な時代だったと思います。いつ死ぬとも分からない。それなのに敵へ向かっていく飛行機もなければ、迎え撃つ武器もなかった。国を守ろうという一心で特攻隊に志願したのに、何も守れなかったという惨めで悔しい思いでいっぱいでした。



森岡 博美さん
(92歳・桑野町)

昭和17年に徳島県師範学校を卒業し、宝田国民学校で教師をしていました。昭和18年、満20歳になった私は、徴兵検査の結果、海軍に合格し、長崎の佐世保にある相浦海兵団に入団しました。出征のとき、親族からもらった日の丸と千人針は今でも大切にしています。海兵団では、師範学校出身の220人とともに、カッターや手旗、銃剣術、水泳などの訓練を受けました。とくに熊本師範出身の馬場君とは、寝床のハンモックが隣で故郷の話などをして仲良くしていました。海兵団を修了後、巡洋艦「那智」の測的の係につく予定でしたが、馬場君が代わってくれという。高性能の巡洋艦に乗りたい。彼は一人っ子で、故郷に恋人がおり、死にたくなかったんです。私は代わってあげた。測的の募集がなく、補充分隊に配置された。ガリ版ができたので軍の極秘文書の伝達・管理をする伝令という係になりました。各方面からあがってくる情報を司令官や副長など上層部に回覧していました。職務上、情報がすべて集まってくる。つぶさに日本の負けっぷりが分かりました。だが、国民へは伝えられていませんでした。レイテ沖海戦での、巡洋艦「那智」撃沈の報は今だに脳裏に焼き付いています。馬場君は戦死しました。わたしが巡洋艦「那智」にこだわっていたら…。人の運命とはわからないものです。

《参考文献》
阿南市史編さん委員会編「阿南市史 第三巻(近代編)」
講談社編「昭和二万日の全記録6 太平洋戦争 昭和16年(19年) 講談社」
家永三郎編「日本の歴史(7) 15年戦争」ほるぷ出版

●開戦へ
中国やフランス領インドシナ連邦へ戦線を拡大する日本に対して、アメリカは強い反発を示し、鉄くず・石油などの対日輸出を中止するとともに、A・B・C・D(アメリカ・イギリス・中国・オランダ)包囲網によって経済封鎖を行った。戦争を回避するために日米交渉が開始されたが、交渉は決裂し、日本軍は昭和16年12月8日、ハワイ真珠湾の奇襲攻撃を行いアメリカに宣戦布告。太平洋戦争の火ぶたが切って落とされた。

●戦線の拡大
開戦当初、日本軍はシンガポールやマニラなどへ進撃し、東南アジア各地を占領するなど、着実に戦果を収めていった。しかし昭和17年6月5日、ミッドウエー海戦の敗北を契機に劣勢となり、連合軍の反撃の前に撤退を続けることとなった。翌18年2月1日には南太平洋ソロモン諸島のガダルカナル島を撤退。19年7月7日にはサイパン島が陥落した。

一方、国内では東条英機内閣に権力が集中し、国民は総力戦体制に組み込まれた。航空機の数を増やすことが最優先されたため中小工商业者は転廃業を余儀なくされたほか、学徒出陣により13万人もの学生・生徒が戦場に赴いた。相次ぐ徴兵に農村の人手不足は食糧危機に拍車をかけ、人々は配給では足りない食料を闇市などで確保しようとした。

●敗戦
制海・制空権を失った日本は、本土においても無防備な状態に陥り、都市は激しい空襲を受けた。そうしたなかで昭和19年7月18日、東条英機内閣が総辞職し、小磯国昭内閣が成立したが、戦況はますます悪化し、国民は食糧をはじめあらゆる生活物資の不足に見舞われ困窮を極めた。

また日本軍は、昭和19年10月、フィリピンのレイテ沖海戦で初めて「神風特別特攻隊」を編成し、航空機による特攻を行った。そしてこれ以降、隊員の生還を期さない体当たり特攻が繰り返されることとなる。特攻は航空機によってだけでなく、人間口ケツト爆弾「桜花」や人間魚雷「回天」、特攻艇「震洋」などでも行われ、多数の特攻隊員が命を落とすこととなった。

昭和20年4月1日、米軍が沖繩に上陸し、6月23日の陥落まで激しい地上戦が繰り広げられ、将兵および民間人が犠牲となった。もはや日本の敗戦は明らかとなり、講和が模索されはじめた。しかし、8月6日の広島および9日の長崎への原爆投下によってさらに30万人以上の犠牲者が出ることとなり、8月9日に突如、ソ連が「日ソ中立条約」を破棄し参戦すると、8月14日、追い詰められた日本政府は連合軍から出されていたポツダム宣言を受諾。無条件降伏を決定して連合軍に通告し、翌15日の正午、昭和天皇のラジオ放送(玉音放送)を通じて国民に敗戦が告げられた。

昭和17年3月、新野の農業学校で青年訓練を受けていたとき、陸軍の歩兵として入隊しました。歩兵第235連隊(鯨部隊)に入り、すぐに中国大陸に渡り、終戦までの4年余り、武漢から長沙、桂林、南昌へと転戦しました。私はいつも腰の水筒にお湯を満タンにしていたので、戦闘中に同僚に「山下、飲み物はないか、飲み物はないか」と重宝がられました。私が戦争に行き感じたのは、日本軍の上層部が情報に疎かだったということ。また、「50万人の敵を1000人で殲滅せよ」、「撃つ玉がなければ殴り殺せ」などと荒唐無稽な命令を下す。武器もなく、負けるのも当然のような状況でした。

昭和20年6月に南昌で中国軍との戦闘中に被弾しました。右肺上部貫通、右肩肩甲骨骨折、脊髄損傷の重傷でした。野戦病院に入院しましたが、負傷者であふれかえっていました。病院には医師もおらず、薬もなかった。歩けるものは退院させられました。終戦後1年、捕虜として南京近くの農村に留め置かれ、炊事班長として、食糧の調達に苦心しました。戦争は、悲しいものです。戦争は、下の者が泣きます。日本も中国も庶民の暮らしぶりは悲惨なものでした。



山下 茂さん
(94歳・新野町)

昭和初めに生まれ、小学生のときに満州事変、中学生のときに日中戦争、高校生・大学生のときに太平洋戦争と、文字通り15年間戦争の元で育ちました。どうせ戦場に行く身だからと自分の将来を決めかね、教師として生きようと思いつめたのは18歳の春でした。その頃は皆、「滅私奉公」「一億一心」「尽忠報国」「欲しがりません勝つまでは」など神国日本の旗印の元、超国家主義、軍国主義の思想に足の爪先まで染まっていました。私が特別幹部候補生として福岡の久留米陸軍予備士官学校に入校したのは、19歳の夏。強烈に印象が残っていることばかりですが、特に上下関係の厳しさに驚きました。私は一般の兵よりも上の伍長という階級だったので、訓練でも、空襲の焼け跡整理でも、親父ほどの年齢の兵がまだ入校したばかりの若造の私に向かって次々と敬礼をするんです。当時、上官に対する欠礼は重罪でした。この時ほど軍律の厳しさを思い知らされたことはありません。

戦争は、災害ではなく人間が起こしたものです。だから人間が止められるはずなんです。私たち一人一人が不戦の誓いを胸底に刻み、美しき、良き伝統文化に支えられた祖国を作るため、毎日を大切に生きなくてはなりません。



埴淵 政美さん
(88歳・羽ノ浦町)

(次号へ続く)